

島松だより

Vol.41

題字・絵／田川正悦



日本キリスト教団
島松伝道所

〒061-1351

北海道恵庭市島松東町4丁目1-8

牧師／辻中徹也・辻中明子

電話・FAX／0123-36-7275

<http://www.simamatsu.org>

それどころか、体の中でほかよりも弱く
見える部分が、かえって必要なのです。

コリントの信徒への手紙一 12.22

満天の星

牧師 辻中明子

9月6日の夜中、大きな地震が起こった。あの夜は、大きな台風が通り過ぎた後で、今夜こそぐっすり眠りたいという晩だった。大きな揺れで目が覚め、家族と揺れが収まるのを待った。幸い家の中は大丈夫で、守られた。やがて、娘の「やばい、やばい」という声で家の外に出た。満天の星たち！夢を見ているのか、巨大なプラネタリムの中に入っているのか、吸い込まれそうな星空だ。

やがて、停電なんだーと気がついた。停電は、全道規模で起こり、ライフラインが停止、生活の不便もさることながら、流通も、医療も、命に関わる不安を感じた方々も多くいた。人間だけではなく、酪農家の牛の搾乳ができなかったり、その後の作業ができなかったり、あらゆる場での影響があり、今でも回復の途中にある方々

がいる。安定した電力の供給が必須で、その研究もさらに進むだろう。

何を見ていたのだろう..

しかし、今でも「満天の星」を忘れることができない。阪神・淡路大震災、東日本大震災の時、友人が語っていた星空はこれだった。人の力が尽きて、すべて途絶えた時、初めて気づくもの、初めて見えるもの。人工の光がある間には気づけない光、見えない光。こんなにも、星々は天に置かれていた。人の力が途絶えていても、神さまが作られたこの世界にはこんなにも星が輝いている。何を見ていたのだろう。電気は欠かせないが、電気を作るために、売るために、買うために、人は必死で空も見上げずあくせく働き続けている。地面ば

かりを見て。人間が万能だと思ひ込み、何か大切なものを忘れていないか？神さまに問われている。

地震前日のこと

9月4日から5日の朝にかけて台風21号。暴風雨だった。教会の庭の周りがある、2階建ての家の高さぐらいに成長したヒバの木4本ともみの木1本が見事に根元から倒れた。ちょうど風の通り道だった。幸い、庭側に倒れたため隣家や車道を塞ぐこともなく済んだ。会堂のトタン屋根の一部が飛び、ガレージが傾いたが後は守られた。倒木を前に啞然としてみると、昼過ぎ、聞きつけた知人が息子さんとチェンソーを持って駆けつけ、それらを片付けて下さった。「朝からこれで、4軒目です、もう右手が上がりません」とニコニコと語った。自分の庭の片付けもあるだろうに、助けを必要としているところにすぐ駆けつける、相手への想像力と行動力が心にしみた。「自宅は井戸水と薪ストーブだから、大丈夫」と、その生活力にも驚かされた。

つながる幸い

この後の日々も忘れられない。地震の安否を尋ねてくださる方々が続いた。久方ぶりの方、初めての方、そっとお見舞いを送金してくださる方、教会で食べてくださいと、地元の名産を送ってくださる教会、こんなにも覚えてくださる方がいて、祈ってくださる方がいる。感謝だ。感激しつつも、これまで自分たちはどうだったのか思い返された。具体的な行動に至らなかったこと

を恥じた。

そんな中、停電中も何人かが集まり食事をし、ほのかな明るさの中で暖かい会話が弾んだ。少し早く通電した教会では、携帯の充電やシャワーを利用する方々で賑わった。建物被害が少なかったおかげであるが、避難所とまではいかなくとも、教会を覚えて利用してくださる方のつながりが嬉しかった。

満天の星のように、神さまはつながる方々を与えておられる。地面だけを見続け、自分だけを見続けているとそのつながりに気づけない。近くに、遠くに、つながっている方々がいる。その祈りが私を支え導く。

大空は御手の業(詩篇19:2)。

